

「指を詰めるか抱かれるか選べ」革手袋のディーラーに朝までカントを賭けさせられた話

「——っ♡♡」

革の匂いがする。煙草と、安いウイスキーと、なめした皮革の匂い。その匂いのする手袋に、僕のいちばん知られたくない場所を驚掴みにされている。

「指か、身体か。選べ」

蛍光灯がジジ、と音を立てている。天井の低い六畳。窓のない控室。バカラテーブルにチップが散らばって、半分は床に落ちている。テーブルの端に鉋。刃が蛍光灯の光をぎらりと跳ね返す。

冴島風。このカジノのディーラー。鉄色の瞳がこっちを見下ろしている。黒髪を一つに束ねて、左耳に黒いピアス。黒の三つ揃えに革手袋。——顎を掴まれている。皮革のざらつきが顎の骨に食い込んだ。

四回目のゲームで袖からカードを出そうとした瞬間、この男に手首を掴まれた。カードを繰るのと同じ速度で、音もなく。

「十秒。選べ」

「……身体の方」

声が掠れた。指を失ったら生活できない。そんな打算だけで口が動いた。——それ以外の意味なんか、ない。

「逃げ」

「……自分でやる」

「五秒以内に」

手が震えてジャケットのボタンが外せない。三秒で冴島の革手袋が襟を掴む。引き裂くように剥がされて、シャツのボタンを上から一つずつ外されていく——カードを繰るのと同じ正確な指さばきで。

ベルトが引き抜かれる。金具がカシャンと床に落ちた。ジーンズが膝まで引き下ろされ、ボクサーパンツ一枚でバカラテーブルの前に立たされる。

冴島の視線が、僕の股間に落ちた。  
——止まった。

男性器の膨らみがない。布地にうっすら浮かぶのは、縦の線だけ。

「……なるほど」

革手袋が、パンツの上から僕の股間をゆっくり覆った。皮の感触が薄い布越しに性器の形をなぞる。

「カントボーイか。イカサマの上に、こんな手札まで隠してたのか」

「っ——触んな……っ♡」

(バレた——)

中学の時に気づいてから、誰にも言わなかった。自分でも触らなかった。男なのに女の性器がついてるなんて、認めたくなくて、見ないふりをしてきた場所。

それが今、最悪の状況で、最悪の相手に暴かれている。

冴島の革手袋がパンツの縁に指をかけた。ゆっくりと引き下ろされる。蛍光灯の白い光の下に、僕のカントが晒された。閉じた割れ目。薄い産毛。一度も他人に見せたことのない場所。

冴島は無表情のまま見下ろして——革手袋を嵌めたまま、中指の腹で割れ目の上を一筋なぞった。

「Nっ♡♡」

革の表面がかさりと乾いた音を立てて肌を擦る。膝が折れかけて、テーブルの縁に手をついた。

（なんで——こんなので——♡♡）

触られたことすらないのに。自分でも触ったことないのに。革越しのたった一撫でて、腰の奥がぞくりと疼いた。

「脚を開け」

「……っ、無理」

「じゃあ鈍のほうで」

泣きそうな顔で、震えながら膝を開く。——選択肢なんか最初からなかった。

冴島は椅子をテーブルの前に引き寄せて座った。僕はテーブルの上に仰向けに倒される。背中にチップが食い込む。硬い丸が脊椎に当たって痛い。

僕の股間が、座った冴島の目の高さに来る。

「……っ、見ないで……っ♡」

「見ないと読めない」

革手袋の中指が、割れ目の上を這った。

コスッ♡コスッ♡コスッ♡——革と肌が擦れる乾いた音。

「あ♡ッ♡な、なに……っ♡♡手袋のまま……っ♡」

「外す理由がない。お前はイカサマ師だ。素手で触る価値もない」

声に抑揚がない。怒ってるのか愉しんでるのか分からない。でも革手袋の指だけは正確に動いて、割れ目に沿って上下しながら、いちばん反応する場所を探っている。

（やだ♡♡読まれてる♡♡身体の反応を全部読まれてる……っ♡♡）

クリトリスの包皮を革の親指で押し上げられた。充血した突起が露出する。

「ここだな。一番カードが揺れてた」

中指の腹でクリトリスをぐり♡ぐり♡と圧迫される。革の繊維がざらりと突起を擦って、腰がテーブルの上で跳ねた。チップがガチャガチャ音を立てて散る。

「おっ♡♡おっ♡♡やだっ♡♡革で……っ♡♡そんなので触られたくな——おあっ♡♡♡」

「お前が選んだゲームだ。降りるならいつでもいい——鉈はそこにある」

口を噛んだ。声を殺す。でも身体は正直で、冴島の革手袋が触れるたびに割れ目から薄く蜜が滲み始めた。革の焦茶色に、濡れた染みが広がっていく。

(嘘……♡♡ 濡れてるなんて……っ♡♡ こんな状況で……男なのに……っ♡♡)

冴島はそれを確認すると、革に染みた蜜を使って割れ目全体をぬるりと撫で下ろした。潤滑の足りない乾いた革が、半端に滑って半端に引っかかる。その不規則な刺激が神経を掻き乱す。

「おっ♡ おっ♡ んんっ♡♡ やっ♡♡ リズム……っ♡♡ バラバラで、わかんない……っ♡♡」

「読ませない手つきってのは、こういうことだ」

ディーラーの手管。カードを読ませないシャッフルと同じ要領で、快感のリズムを崩してくる。次に何が来るか分からない。構えられない。全部が不意打ち。

革手袋の中指が割れ目の中にずぷり♡と沈み込んだ。

「おおっ♡♡♡ 手袋っ♡♡ 手袋ごと入って……っ♡♡♡ ぬ、抜いて……っ♡♡」

「きつい。だが中は正直だ——もう俺の指に吸い付いてる」

(やだっ♡♡ ほんとだ……っ♡♡ おまんこが勝手に革の指を締めつけてる……っ♡♡)

認めたくないのに。男なのに。カントに指一本入れられただけで、中の肉が革の感触に纏わりつく。

革に包まれた中指がカントの内壁を這い回る。縫い目が粘膜を擦って、素手とはまったく違う凹凸の刺激を送り込んでくる。

ずちゅ♡ずちゅ♡ずちゅ♡——愛液が革に染みて音が変わった。乾いた摩擦から、ぐちゅ♡ぐちゅ♡という粘着質な音に。

二本目が加わる。中指と薬指。革手袋がカントの中でぐい♡と内壁を押し広げた。

「ひっ♡♡ んんんんっ♡♡♡ 二本♡♡ 革で二本っ♡♡ 中こすれてっ♡♡ 縫い目が♡♡ 縫い目当たってるう♡♡♡」

（こんなの知らない♡♡ 自分の身体がこんな声出すなんて知らなかった♡♡）

冴島の左手がテーブルの上に散乱したチップを一枚拾った。——それをクリトリスに当てる。コン♡。

上と下の同時攻撃。革手袋の指が中をかき回しながら、クリトリスをチップの縁で弾く。

「お前がイカサマで稼いだ分だ。一枚ずつ身体で返してもらう」

コンッ♡コンッ♡コンッ♡——チップが突起を弾くたびに腰が跳ね上がる。同時に中の革指がぐりん♡と回転して奥を抉った。

「おひいっ♡♡♡ らめ♡♡ らめ♡♡ 中とクリ♡♡ 同時にされたらっ♡♡♡ 頭っ♡♡ 頭おかしくなっ——♡♡♡」

「おかしくなるまでがゲームだ」

左手でクリトリスにチップを押し当てたまま小刻みに振動させ、右手の革手袋二本指で子宮口を突き上げてくる。

「おおおおっ♡♡♡♡ くるっ♡♡ なんか来るっ♡♡♡ お腹の奥から——ッ♡♡♡♡」

（やだっ♡♡ こんな初めてなのに♡♡ こんな場所でこんな男にっ♡♡ イカされるなんてっ♡♡♡）

「イケ。ゲームセットだ」

グリンッ♡♡——革の指先が子宮口を捏ね回すと同時に、チップでクリトリスを潰された。

「おおおおおおっっ♡♡♡♡♡」

プシュウッ♡♡♡——潮が噴いた。冴島の革手袋を濡らし、テーブルの上のチップに飛沫が散る。全身をガクガク痙攣させて、生まれて初めてのアクメに墜ちた。

（イ……イっちゃった♡♡♡ 男なのに♡♡ おまんこでイっちゃった♡♡♡ 革の手袋なんかで♡♡♡）



冴島は革手袋を引き抜いた。びしょ濡れの革が蛍光灯の光を反射する。

「……いい手札だった」

その指を自分の唇に当てて舐めた。革越しに、僕の味を確かめるように。

鉄色の目だけが——初めて、暗い炎を宿していた。

冴島が椅子から立ち上がる。革手袋を——右手だけ、外した。左はつけたまま。

スラックスのベルトを外す。ファスナーの音。白シャツとベストはそのまま。

露出した肉棒は太くて長い。怒張して静脈が浮き、先端から先走りが糸を引いている。

「まだゲームの途中だ。お前の身体には、まだ返し切れてない借りがある」

「っ……♡♡ まっ……待って……♡♡」

アクメの余韻で思考が回らない。テーブルの上で仰向けのまま、散乱したチップに埋もれて荒い息を繰り返す。

冴島は僕の両足首を掴んで、テーブルの端に引き寄せた。チップが身体の下でガチャガチャ鳴る。両脚をM字に開かされて、冴島の腰の高さに合わされた。

革手袋を外した右手の素指で——初めて、素肌でカントに触れてくる。